

塩田真穂美作 「苦しみのかなたに」

塩田真穂美ナレーション わたしの左の頬は、生まれつき、血管腫というアザで覆われています。小さいころ、わたしは、母に連れられて病院へ通いましたが、現代の医学では、わたしのアザを消すことはできませんでした。それでわたしは 2 歳ごろから、カバーマークという一種の化粧品を左の頬だけ使用しています。

わたしは、中 2 の 3 学期に、父の転勤のため、今まで慣れ親しんできた学校を転校しましたが、新しい学校は知らない人ばかりでした。間もなくわたしは中 3 になりましたが、一部の友達は、わたしがお化粧をしていることを理解してくれませんでした。

男子 A 見ろよ、あいつ。気持ち悪いなあ。

男子 B ほんとだ。あいつ、この間転校してきた子だろ？ 見ろ、化粧してるぜ。

男子 A まるで不良じゃねえか。

ナレーション 今考えてみると、その時、「不良なんかじゃない」って本当の訳を言えばよかったのですが、勇気が出ず、そのままになってしまいました。

わたしの学校生活は、こういうことの繰り返しでした。しかし、わたしにも親友ができました。彼女、斎藤さんはわたしのことを理解してくれました。

斎藤 ほかの人のことなんか気にしていたら、生きていけないわよ。

真穂美 でも、毎日毎日、イヤなことばかり言われて、このごろは、家に帰ってから泣かない日はないわ。日記に書くことも暗い話題ばかり。

斎藤 いいわ。今度、あなたに変なこと言う人がいたら、わたしがにらんであげる。だから元気を出して。

ナレーション 彼女はいい人でした。わたしは、1 学期の間は、彼女の励ましによって、学校に通うことができました。そして夏休み——。わたしにとってそれは、嫌な思いをせずに受験勉強に集中できるつかの間の時でした。でも、その夏休みもあつと言う間に過ぎ、2 学期が始まりました。

真穂美(モノローグ) また学校へ行かなければいけない。学校なんかなければいいのに…。

ナレーション そう思いながら学校へ通うわたしの足取りは、重くなりました。

男子 C あいつまだ学校へ来てるよ。人に不快な印象与えてるの知らないのか？ あれでも人間か？

男子 D それに、いつも左側しか化粧してこないところをみると、あいつの家、貧乏じゃないのか？

男子一同 (笑い)

ナレーション 今までわたしは、いろいろなもののしりを聞かないふりをしてきましたが、その時の男子生徒の会話に、わたしの我慢は限度を超えました。

真穂美(モノローグ) ひ、ひどい…。どうして、どうしてわたしだけが、こんな風に毎日苦しめられなくてはいけないの？ わたしは学校生活がちっとも楽しくない。それなのに、ほかの人は中学校生活を楽しんでいるわ。同じ人間なのに不公平よ！ わたしなんか、この世に生きていても仕方がない人間なのよ。(泣きながら)もうあしたから学校へは絶対に行かないわ。そして、そして、死にたい！(エコー)

ナレーション ところがその夜、わたしはいつか聞くとともになしに聞いた母の言葉をふっと思い出したのです。

母 (エコ) 上野さんの明子ちゃん、体の調子が思うようにいなくて、ずいぶん苦しんでいたでしょ。でも、そのことに負けないで、教会へ行って、神様のことを信じて、一生懸命頑張っているんですって。

真穂美(モノローグ) (ハツとして) 教会…。わたしも、今度教会へ行ってみよう。

ナレーション わたしは、教会というところがどういうところで、どんなことをするのか知らなかったのですが、胸を躍らせながら、次の日曜日、生まれて初めての教会に行きました。

音楽 (賛美歌)

ナレーション 今でも、その時の聖歌隊の賛美が美しかったことを、忘れることができません。それに、教会の方は皆さん、わたしのことを変な目で見ないで、たくさんの方が話しかけてくださったのです。わたしは、うれしさで胸がキューンと熱くなりました。その一人に、普喜さんという方がいらっやいました。

普喜さん こんにちは。教会の印象はどうですか？ また来週も来てくださいね。

真穂美 はい。また来週きます。きっと来ます。

ナレーション わたしは、来週も教会へ行くとすると、希望が持て、学校へ行くことも苦にはなりませんでした。そして次の日曜日――。

普喜さん よく来てくれたわ。

真穂美 この1週間、日曜日が待ち遠しかったです。あの… わたしの悩みを聞いていただけませんか？

ナレーション わたしは、まだ1回しか会っていない人に、どうして自分の悩みを話す気になったのか、不思議でした。でも、まるで心の抑えの糸が切れたように、わたしは、今までの苦しみのすべてを、普喜さんにお話ししました。

普喜さん そう…。大変だったわねえ。でも、中3にもなって、そんなひどいことを言う人がいるの。そんなこと、言うほうがおかしいのよ。気にしちゃダメよ。神様はすべての人を愛してくださっているのよ。

ナレーション そう言って、普喜さんは、わたしのためにお祈りをしてくださいました。

普喜さん (祈り) 神様、どうぞいつもあなたが塩田さんのそばにいて、つらい時、苦しい時にもお守りください。

ナレーション わたしは、“神様はすべての人を愛してくださる”という言葉に、感激しました。それ以来、わたしには神様がいらっやるのだと思うと、人から変なことを言われても、あまり苦しまずに済みました。

音楽 (ブリッジ)

ナレーション 月日はたち、受験の時期になりました。

真穂美 わたし、私立の女子高に行きたい。もう男女共学は中学で懲りたわ。お願い、私立へ行かせて。

母 いいわよ。私立へ行っても、一生懸命勉強するのよ。

ナレーション こうして、わたしは私立への進学を希望しました。

先生 君は、私立志望だったね。君は気が小さいようだから、確実に入れるところがいいと思うんだけど。

真穂美 西北高校はどうでしょうか？

先生 うん、あそこなら大丈夫だ。

ナレーション　そして、わたしと母は、その高校へ願書を出しに行きました。私立は風紀が厳しいということを知っていたので、その時、母はわたしがお化粧をしていることを、そこの先生のお話しました。すると――。

私立の先生　うちの高校は、そういう理由があるのだしたら、全然心配要りませんから、どうぞ受験してください。

ナレーション　その言葉を聞いて、わたしは安心して受験しました。しかし合格発表の前日、母とわたしはお化粧のことでその高校の校長先生に呼ばれました。

私立の校長　お化粧している理由はよく分かるんですが、周りの生徒の風紀を乱すからね。そのお化粧を取るのなら、合格にします。

私立の先生　校長先生、理由が理由ですから、もう一度、職員会議にかけたらいかがでしょう。

私立の校長　そうの必要はない。君、そのお化粧を取る気がありますか？

真穂美　いいえ、ありません。

私立の校長　それなら、もう一度 家に帰って考え直しなさい。

音楽　(重苦しい感じ)

ナレーション　そのあまりにもひどすぎる言葉に、校門を出た時には、涙が止まりませんでした。帰りのタクシーの中で、わたしは――。

真穂美(モノローグ)　まさか、このお化粧のことで合否が決まるなんて、夢にも思っていなかったわ。どうしてわたしだけが、いつもいつもこんなに苦しめられるのかしら。神様なんか、わたしにはいない。(泣きながら)神様がいるのなら、こんなに苦しめないはずよ！

ナレーション　そう思いながら、わたしは泣き続けていましたが、家に着いて、少しずつ心が落ち着いてくると、普喜さんの言葉を思い出しました。

普喜さん　(エコー)あなたに、このつらさを乗り越える力が与えられ、一番良い道が開かれるように、お祈りしています。

ナレーション　その時――。

真穂美(モノローグ)　落ちてもいいから、都立を受けてみよう！

ナレーション　そう決心して都立を受けたわたしは、神様のお恵みにより、合格することができました。

真穂美　この合格は、神様に「都立へ行きなさい」と勧められているような気がする。もしかすると、わたしにとって、都立へ行くことが一番いい道なのかもしれない。すべてを神様にゆだねよう。

音楽　(明るい感じ)

ナレーション　こうして、わたしの新しい高校生活が始まりました。周りのお友達の理解の中で、わたしは、都立へ行くことがわたしにとって一番いい道だったのだと気づきました。でも本当は、変わったのは学校ではなくて、わたしの心だったのです。今まで人を恨んだりねたんだりして、自分が罪びとだということを、わたしははっきりと知りました。5月の若葉が香るころ、わたしはイエス・キリストを受け入れました。わたしの主、わたしの救い主として――。

聖書の言葉　苦しみに会ったことは、私にとってしあわせでした。私はそれであなたのおきてを学びました。(詩篇 119:71)

<完>